

幽霊は出てくるといふことではな
 さま、村を廻り出ることである、
 了肉村の悪霊は夫は其の血、いまだ、
 心、半貫半割の井原をいまだ、
 肉村の悪霊は夫は其の血、いまだ、
 肉村の悪霊は夫は其の血、いまだ、
 幽霊は出てくるといふことではな

幽霊の書

エリニヤスの書



天竺の書
 天竺の書、天竺の書、天竺の書、
 天竺の書、天竺の書、天竺の書、
 天竺の書、天竺の書、天竺の書、

天竺の書

空中の書

空中の書

紙田 彰

林檎の研究をしている友人に次のような話を聞いた

虫が湧くときに森の番人が注意しなければならぬのは、虫の口から漏らされる液体を中和することではなく、果実の中に棲む生命の素が暴れださぬように手を打つことである、と

酔顔の微笑

眼の泉に点々と注がれるものが純水であるとするならば、おまえたちの滂沱はいまや軽快なる天使の貌。

眼の泉に滾々と湧き出るものみな純水と呼びうるならば、おまえたちの滂沱はさながらに軽快な天使の貌。

てのひらの道は過去に通じ、未来の建物を影の細部まで映している。おまえの名こそ人知れず朽糜の光栄をもたらすものなれど、ここは酔顔の微笑が愛撫のとき。

エリニユスの裔

眷属の声

幽霊を見ていた。

肉体と魂の分離の術を試みていたとき。

病人用の質素な寝台の白い敷布の上で、細い体を人形のように静かに伸ばし、心臓の上で指を組む。半覚半睡の状態をめざし、夢を見るようなつもりで、ただ意志だけを鞏固にしている。やがて肉体の感覚が失われてゆく。いまだ、少年は考える。

いま、体を脱け出ることができると。

幽霊が訪うたのはこのときだった。



実験室のドアが、鍵のかかっているにもかかわらず、音もなく開き、すでにドアの前に、白っぽい、やや薄汚れた長い布を纏った男が目を爛々と光らせ、漂うごとくに佇んでいた。おれの胤、おれの分身、一族の者よ、幽霊は語った。いや、語ったわけではない。そのような思念を、心と心を結ぶ対話の術で、少年に言葉を告げたのである。

おれは十年前に悪逆無道の罪人として、死を与えられた。爾来、悪逆の念としてこの世を呪い続けていた。おれは特別な悪人だ。だが、どうしようもない血を持った男だ。おまえの母親は自ら進んで、このおれに抱かれたのだ。

少年は忌わしい緊張感などというものに囚われぬ自分に驚愕していた。幽霊の語る言葉がよく呑み込めぬままに、ほんやりと寛いでいた。なつかしい匂いを嗅ぐような気もした。

覚悟の一服

海辺に着いたときには、すでに夕陽も翳り、雲気が水平線の向うから頭上の空にまで押し寄せてきていた。

灰色の砂浜がいつそう濃い翳りと、海からの湿った風を受け、黒々とした影に変じてゆく。

少年の担いできた新品のテントは、夕闇の中に眩しいくらい明るい黄色だった。

老人は何も言わずに荷を解くと、砂の上にはばらばらに投げ出したまま煙草に火を点けた。ひとくち、重そうな息をついて、その煙草を少年の目の前に差し出した。

溺死に似せて

水の冷たさと殺意の衝動がびったりと重なってくる。針のような鋭さだと少年は考える。華奢な腕のどこにそんな力が潜められているのかという常套句。老人の光を失った瞳の奥に、運命の受

容とかに似た優しさのような表情が掠める。それだけだ。ものの数分間の暗闇。赤黒い月は沖合にかかったまま、その数分間を凝視している。観客はその月を通して光景を楽しんでいるのであろう。充血した眼と白蠟のような顔。水の色にも似た死の訪れ。

静謐のひととき

静かな睡り、ときとして凍るような夢。幼年期の薄墨色の景色から、渦巻の形をして浮かび上がる極彩色の洪水。耳鳴りを伴って訪れる体表の微妙な顫動、輪転機に附随する独特の匂い。蜜柑の涸いた皮、ソーセージの包装紙。夜が好きというのでもなく、嫌いというのでもなく。眼の芯にあたる空洞に棲む者たち、栓をした頭脳など……平癒の向くべき空のまなざし。銃口がこちらを向いている、空間には紫の翳が流れる。声を出してはいけけない、頭の禿げたフランス人が囁く。燈を点してもいけないのだらう。革表紙の書物の位置がずれている。ときおり数本の蠟燭が濡れたように光っている。罰を、鞭を、割れたビール壘を。数秒ののちに静けさの極限を迎える、喉から弱い息が洩れるだけに……

人類の鉦脈

最初に出会ったのは優しい眼をした狂女であった。眷属の一人であるから雰囲気は思い浮かぶのだが、明瞭な顔の輪郭は記憶の底に沈んでいる。雪が降っていたのかも知れぬが、降っていないか。たかかも知れない。まだ晩秋の頃であったかも知れない。田圃の傍の清らかなせせらぎで洗い物

をしている後ろ姿も、和服であつたようにも思えるが、判然としない。振り返った女と言葉を交しているのだが、何を喋つたのか、たぶん挨拶をしたのだろうが、その貌ともども思ひ出すことはできない。もしかすると、彼女に関する思ひ出とは、後年になって一族の不可思議な秘匿の匂いと証言によって組み立てられたにすぎないものなのかも知れない。

だが、たしかに最初に会つたのは彼女のはずである。逆算すると、二十三、四歳、それ以降は知らない。

人類の鉱脈

烟草のあるところにライターがあると決めてかかつて、書物の蔭の烟草の箱に手を伸ばすとライターの影も形もない。つまりこういうことだ。たしかに烟草と一緒にライターを置いたのだが、それは新聞の蔭であつてこちらではない。烟草は二つあつたのである。なにやら嫌な気がして頭を軽く左右に振っていると、耳の奥で澄明な鈴の音がした。耳朶はやわらかくて気持のいいものだが、あの洞窟はいくぶん気色が悪い。ひとりで侵入してみたが、誰もいないので閉口した。たしか帆柱をあげて素晴らしい勢いで航海したのだが、いまや寸秒。そうこうするうち燦然とした都市に着いていた。このときは鈴の音が高樓のてっぺんに突き出た尖塔に発していると知っている。

砌の下に T・S氏に

石仏の首が

際限なく転ってゆく

賽の目を数えずとも

露地裏には秘密の部屋があり

男の肩にはヒ首が刺さっている

硝子の汗を噴いて

心臓は鉄でつくられた。この心臓は音は高きので、人に出たとき、かきつけて、

だらだら坂は小糠雨に光り、降りて来た。この心臓は、この心臓は、

銀の蝶を縫い込んだ靴の中に、この心臓は、この心臓は、

スウェーデンボルグの著作が一冊、この心臓は、この心臓は、

ガス燈が闇を円形に照す、この心臓は、この心臓は、

決死の闘いとは、この心臓は、この心臓は、

気障な溜息

鎖骨二本が急所である

額に五寸釘が打たれると

夜々の濛気が氷解する

水晶の坏に、この心臓は、この心臓は、

経血は釣り合ぬ、この心臓は、この心臓は、

龍騎兵を奪うには、この心臓は、この心臓は、

腕力が肝要だ、この心臓は、この心臓は、

きしり、この心臓は、この心臓は、

きしり、この心臓は、この心臓は、

球形の棺に

百科事典が葬られると

不気味な鳥類は

アポロンの箭で串刺し

浮揚する机上に

頭腦のモデルと

博奕打の胆

精囊に

針と文字盤が蔵われる

女の睫に血が滲む

愛撫されても睨らない

名を呼ぶと

砌の下に沁み込んでゆく

誰もいない公園の向うに

朽た卒塔婆を見る

境内でけたたましく喋る

絵馬の中の神々

石燈籠に残された

黒髪の一束

物怪が御辞儀する

滴

時計の針を

神話の錘りとする

いまや聖霊たちの夜宴

星は

都市の遺構にまで

悪意の粉片を積もらせる

寸秒の女神が

悖徳の詩人と交接する

左手には習慣性のある怒り

右手には焚書に供するノオト

筒先には禍いの唇

そのような人体は

いかなる存在とも同じか

いかなる未来とも交わらずに

永遠の滴として

尖った針に姦される

人形たち

人形が数体

稽古用のバス・ドラムの腹に

沙の涸いた喉笛に

詩人の義眼の中に

玉葱の海に浮かんで

火傷のために

鋭い声をあげている

土の底に月ごとの滴を注ぐため

遙かな青空に喋まれた言葉を与えるため

時という虫に啖わせるために

折れ曲がった手足

むしられて逆立つ金髪

抉られた眸の奥のぜんまい

ぬりたくられた狂えるもの

彼女たちはよみがえる

きまって深更

一瞬の夜宴

ありとある家々で
あふれる空気の中で
世界を腐敗させる
峻烈な意志

海に浮かぶ館の

とある部屋の片隅に
かくのごときを誌す書物がある
つまり

海の歴史しか持たぬ

あらゆる家々の

岸辺

忘却のアシは

切岸から突き出ている
聖なる声をまねて
亡霊の名を呼ぶ
十数億年の生涯を
一箇の砂粒に封じ

齡老いた光
遺されたルーン文字

フネが迂る

月光と影のささやき

青い裸身よ

風にふれる乳房

するどい腰

尻の盪惑的な曲線

ふかい溪間よ

母なる物質の彼方

ふたたび想い出せぬ

その名

処女の血のこわれる

ふるいふるい戦い

娘らの命で織り上げた布が

若者の蒼い髪を束ねていた

黄金の死の顔に

すでに名前はない

（……へその緒）

亡霊のかたちは東はアノ式
泡の自在な殻に吞まれ
十億の浜辺の輝け
百億の水底こぼれる

夢が波のように遍在している
光はより大きな光のために
振り曲げられ
永遠の渦を巻く

光のうちにあるものは幸いなるかな
光は無限に直なる神
光の外にあるものは不吉なるかな
光はあくまでとどこおるもの

わが砂のゆくえ

夢にあらわれ

鏡のごとく流れゆく――

時はまばたき

夢の胞子にあるべきなり
おお クリスタロイド
最初の名のはじまり

忘却のアシは

一瞬の距離しか知らない
それは一瞬の跳躍

流れゆくものなべて

永劫の遮断である

誘惑

(1)

そもそもベルの鳴り方からして妙だった。低い微かな音でありながら、目覚時計のように鋭く細い連続音なのである。

大きな油虫が素晴らしい速度で、濃緑の絨緞の対角線上を疾ってゆく。六畳の居室は机の上のライトを点けたきりなので薄暗く、エナメルのような硬い光を燦かせた虫が闇の中に残像を見せたまま吸われてゆくと、もう見つけることはできない。背筋に冷えた空気が貼りつくような気味悪さを覚えながら、幾度かの呼出音の後、受話器を取り上げてみた。

優雅なアルトが、夜更の電話の非礼を丁重に詫びながら、ある集まりに招待する旨即刻来場を乞

うと告げた。

奇妙な性癖を持つ友人の名が二、三挙げられていたようだが、ほんやりと油虫の消えた辺りに眼を凝らしながら不吉な予感に捉われていた。心配することはない、決して怪しい集まりではないと、電話の主が言っているかのような錯覚も覚えたが、不吉な想いは癒えなかった。というより、なおも昂進したのである。

女の声が魂を揺する性質のものであったことも一因なのだが、なによりも電話という器械を介したはずの声が器械の匂いをいささかも感じさせぬばかりか、頭脳を麻痺させてしまうような、地の底かなにやらの別世界から唐突に躍り込んできたかのような気配を漲らせていたからである。

その蠱惑的な声に酔いながら、集まりの場所が伝えられるまで、女の喋るにまかせていた。饒舌というよりも、軟質の声音で滑るようにゆっくりと語られていた。最後に目的地の住居表示が告げられる頃には、すっかりその女の声の魔力に犯されていた。行先の場所が所蔵の地図に載っていないのはすぐわかったが、なになんとか行けるだろうと考え、その招きに丁重に礼を返し、応ずることを付け加えると、体を羽毛で愛撫されるかのような妙に艶かしい笑い声を耳に残したまま電話は切れた。驚いたことに、最後の一言を除くと、電話の廻路を独占していたのは女の声ばかりであった。

魂に得体の知れないものが注がれたように、長い余韻が闇の中に滞っていた。